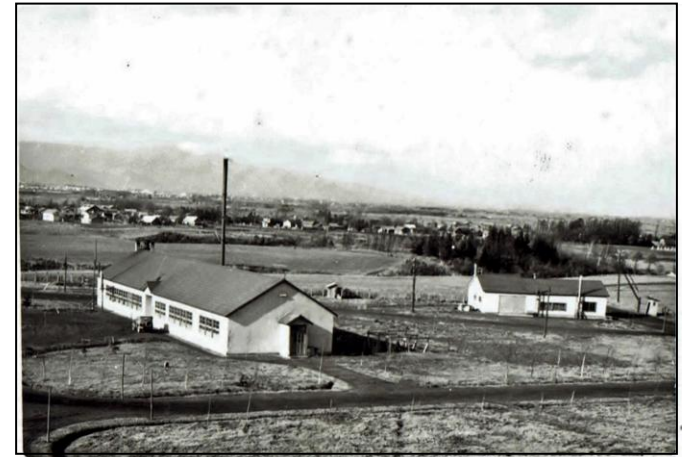


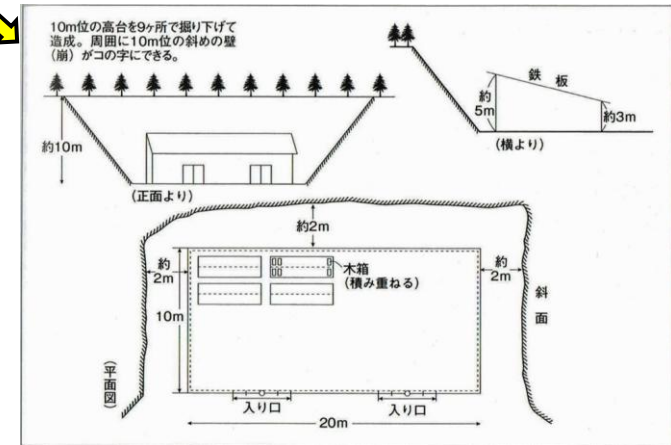
戦争と厚別 1 弾薬庫が新札幌に



アメリカ軍に接收された旧陸軍厚別弾薬庫 1942(昭和22)年9月 米軍撮影 国土地理院地図より



陸上自衛隊厚別弾薬支処の事務所
1960(昭和35)年 故船木廣司氏 撮影

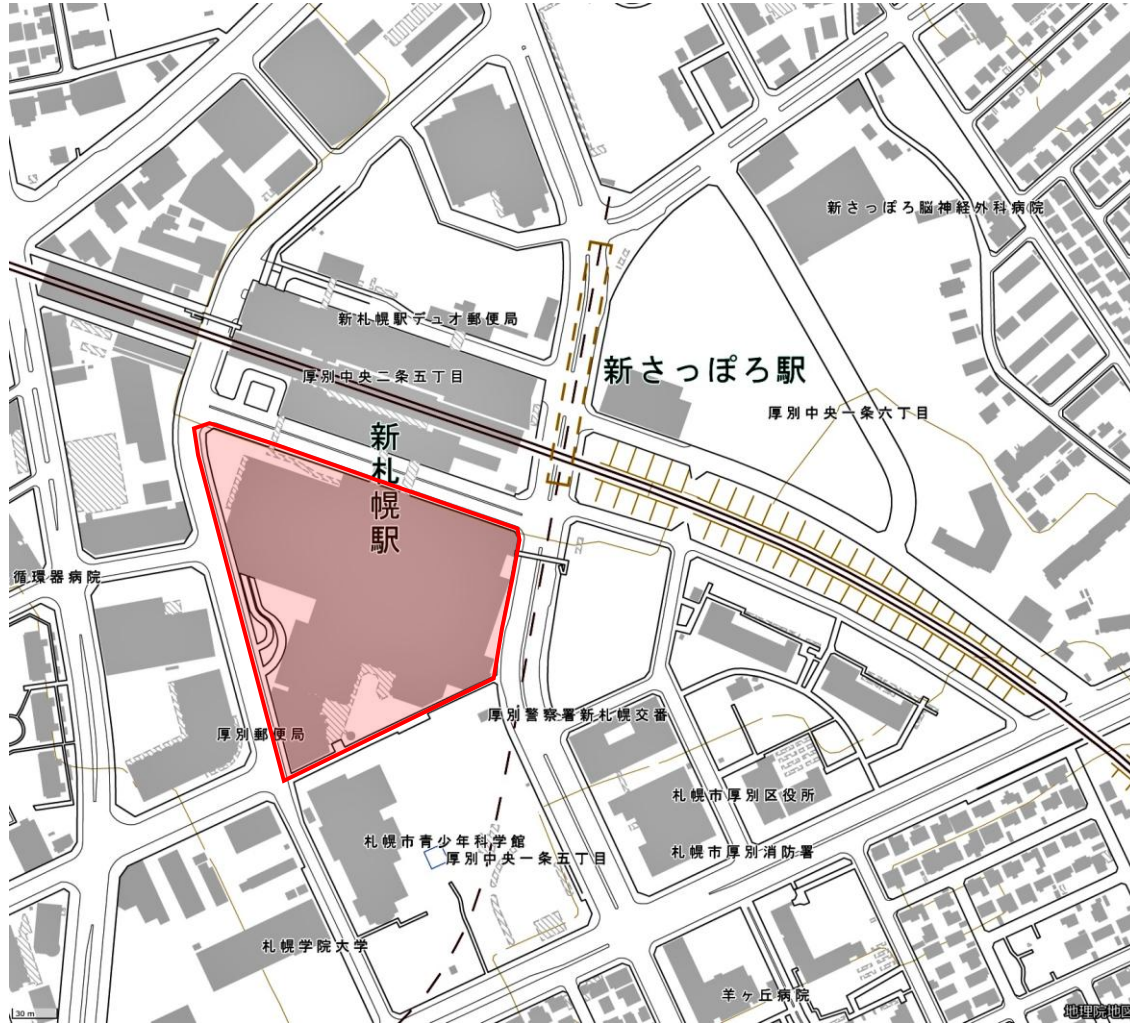


札幌郷土を掘る会が作成した弾薬庫の図

太平洋戦争終盤の1944(昭和19)年10月、北海道陸軍兵器補給廠が今の白石区役所一带に、弾薬庫が今のJR新札幌駅付近に設けられました。弾薬庫の敷地は35ha余りで、9棟の弾薬庫が作られました。保管した砲弾の中には大量の毒ガス兵器も含まれていました。終戦直前の1945(昭和20)年7月には、北海道各地が空襲されたのを受けて、危険度の高い弾薬は、急遽大谷地などの山林の中に移されました。幸い弾薬庫は空襲を免れました。しかし、のどかな田園地帯だったこの地域も、大きな危険と隣り合わせだったのです。弾薬庫は、戦後アメリカ軍に接收された後、陸上自衛隊に引き継がれ、北海道地区補給所厚別弾薬支処として使われました。

札幌市が将来のまちづくりを見据えて自衛隊に弾薬庫の移転を申し入れたのは 1963(昭和38)年のことです。6年後の1969(昭和44)年、日高町への移転がようやく実現し、跡地に新札幌の街が作られました。

戦争と厚別 2 弾薬庫が新札幌に



現在の新札幌 国土地理院

上の地図と右の写真は同じエリアのものです。新札幌の街は弾薬庫の跡地と重なっていることがわかります。跡地の中央部にJR千歳線が作られたことになります。新札幌駅が開業したのは弾薬庫の移転から4年後の1973(昭和48)年9月でした。



1961(昭和36)年の航空写真 国土地理院

弾薬庫というまとまった土地が取得できたことで、札幌市による厚別副都心＝新札幌の開発は一気に進みます。

戦争と厚別 3 戦後開拓地に建った記念塔

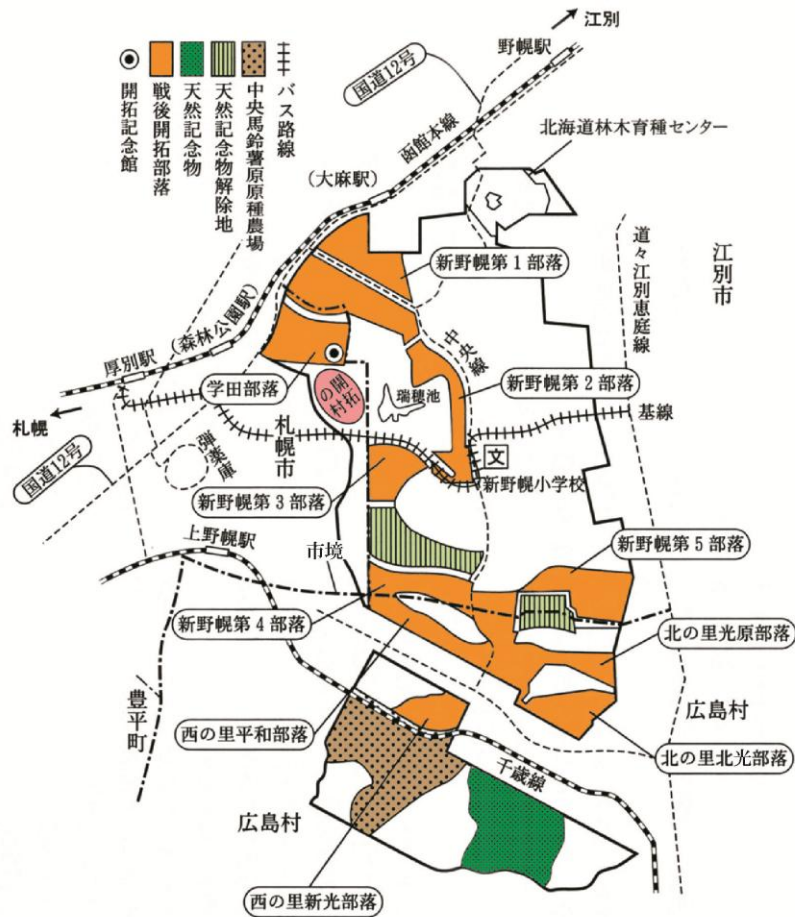


図 1960年（昭和35年）当時の野幌国有林内の戦後開拓部落位置略図

（江別市・広島村・札幌市）

大麻駅は1966年、厚別弾薬庫の場所に開設された新札幌駅は1973年、森林公園駅は1984年に開設された。西田秀子「林業試験場の人びと」『野幌原始林物語』（2003）を補筆・修正し、掲載。

1960年当時の野幌森林公園内の戦後開拓集落
（西田秀子氏作成）



「北海道開拓記念館開設準備だより」（1970年7月20日）より

国道12号線から北海道百年記念塔にかけての学田地区は、戦後の緊急開拓で開墾されたエリアです。緊急開拓は、戦災にあった人たちが、旧満州・樺太などからの引揚者、復員者の生活を再建するために、国や道が推進しました。野幌国有林（現森林公園）内の一部も開拓用地に充てられ、左の図のように、新野幌部落（1～5）と学田部落には、1947（昭和22）年までに110戸余りが開拓に入りました。このうち学田地区には8戸が移住しました。水利はなく、水はけの悪い重粘土質の耕作には適さない土地で、開拓は苦労の連続でした。

戦争と厚別 4 戦後開拓地に建った記念塔

～開拓支えた厚別弾薬庫由来の火薬抜根～



伐採後の根株



根株に火薬と導火線を付ける



数十メートル離れて着火ボタンを押し、爆破した瞬間

困難な開拓に大いに役だったのが、厚別弾薬庫で要らなくなった火薬でした。厚別弾薬庫は、戦後アメリカ軍に接收されました。不要になった陸軍の火薬の一部は、産業用に使うという条件で、釧路監理局が譲り受けました。火薬主任（陸軍曹長）として弾薬庫の管理に当たってきた寺崎清次氏は、この火薬を開墾に利用することを思いつきます。寺崎氏自身、野幌国有林内の一角に開拓に入ることを決意していました。開墾で一番大変なのは、切り倒した木の根株を取り除く抜根作業です。

寺崎氏は根株の下に火薬を仕掛けて爆破させ、抜根するテストを行い、成功します。北海道も寺崎氏の提案を受けて、火薬抜根の普及に乗り出しました。寺崎氏は学田を含む野幌国有林内をはじめ、全道を回って、開拓農家に火薬抜根のやり方を指導しました。火薬を使う危険な作業だけに事故もあったということですが、戦争の遺物が、平和利用によって、再起をかけた開拓農家を助けたのでした。

（写真：西田秀子氏所蔵）

戦争と厚別 5 厚別から南京へ 従軍僧の戦中と戦後



南京別院時代の
安楽寺先々代住職 横湯通之氏



南京仏学院二期生の卒業式
(前から3列目中央が横湯通之氏)

1937(昭和12)年7月、盧溝橋事件を機に日中全面戦争が始まりました。12月、日本軍は中華民国の首都・南京を攻略し占領しました。「皇道仏教」を推し進めていた日本仏教界の各宗派は、軍に協力して、占領地にこぞって布教拠点を開設していました。南京にもそれぞれ別院(本山直属の寺院)などを設けました。

厚別中央の安楽寺の先々代住職・横湯通之氏は(よこゆ・つうし 当時41歳)浄土真宗本願寺派(西本願寺)の南京別院の創建輪番(住職)に任命され、日本軍とともに南京に入城しました。その際軍が盛大に行った戦没者の慰霊祭(本願寺派トップの門主も参列)では墓標を揮毫し、北海タイムスの取材に「一生一代の光栄」と語っています。

横湯氏は敗戦後まで8年半にわたり単身南京に滞在。戦没者の葬儀などを行うとともに、「南京仏学院」を開設。布教のため中国人僧侶の育成に取り組みました。しかし、南京攻略では一般市民も巻き込んだ激しい戦闘で非常に多くの犠牲者を出しただけに反日感情は強く、布教は予想以上に困難だったといえます。



昭和40年 引揚援護事業功労厚生大臣表彰

戦後日本に引き上げてきた横湯氏は、安楽寺の住職を務めるかわら、引揚者団体北海道連合会の会長に就任。長年にわたって自分と同じように外地や樺太などから引き上げてきた人たちの生活支援活動に尽力しました。元々ヘビースモーカーでしたが、「最後の一人が引き上げるまで禁煙する」と宣言し、禁煙を貫いたといわれています。

また、小樽双葉高校や旭川龍谷高校の校長を務めたほか、安楽寺の境内に幼稚園を開設するなど教育にも力を注ぎました。そうした功績でさまざまな表彰を受けています。

しかし、南京時代のことについては、家族にも黙して語りませんでした。若い頃から短歌をたしなみ、歌集も編まれています。南京時代に詠んだ歌は残されていません。1977(昭和52)年、81歳で激動の生涯を終えました。



首から提げていた筒には、戦没者の葬儀に備え南無阿弥陀仏と書かれた小さな掛け軸が入っていました。色もはげ、折れ曲がった所もある筒は、戦地での活動の厳しさを物語っています。

戦争と厚別 6 厚別から南京へ 従軍僧の戦中と戦後



安楽寺納骨堂の阿弥陀如来像は、横湯通之氏が南京に赴任する際に南京別院の本尊にと、檀家の人たちが寄付を募って作り、通之氏に持たせたものでした。通之氏は敗戦の翌年、身一つで引き揚げて来ましたが、この仏像だけは大事に持ち帰ったということです。



安楽寺納骨堂の本尊 阿弥陀如来像

通之氏が引揚者の支援活動を行っていたことから、戦後、寺には道内各地から、供養をしてほしいと多くの戦争犠牲者の遺骨が寄せられました。納骨堂の下には、そうした遺骨が埋葬されています。



安楽寺の現住職 横湯誓之氏



念仏者九条の会・北海道の集会(ことし7月)

通之氏の孫で、安楽寺現住職の横湯誓之(ちかし)さんは、通之氏の戦中・戦後の歩みについて語る活動をしています。誓之さんは「祖父が南京時代について語らなかったのも、引揚者の支援に尽力したのも、戦争に協力したことへの慚愧の念からだったのではないかな。心が痛かったのだろうと思う。その心中を思うと、私も切ない」と話しています。



戦没者追悼法要(ことし8月)



安楽寺ではことしも8月16日に、盂蘭盆会に合わせて戦没者の追悼法要が行われました。以前は、厚別区内の浄土真宗の智徳寺、大行寺と持ち回りで行っていましたが、今は二つの寺の僧侶も安楽寺に集まり、合同で行っています。祭壇の前に掲げられた赤い縁取りの掛け軸には、三つの寺の檀家の戦没者一人一人の名前が書かれています。法要で誓之さんは「戦争がもたらした痛苦の記憶は遠いものになりつつある。過去を反省し、私たちが今何を残すべきか問い続ける必要がある」と訴えました。

「戦争に加担したことを時代のせいにははいけない。宗教は人を導くものだが、悪い方に導いてしまうおそれもある。それを肝に銘じ、平和を求めて行かなければならない」。戦後80年の思いです。

通之氏が亡くなって14年後の1991(平成3)年、本願寺派の宗会(宗派の議会)は、太平洋戦争への協力を懺悔する決議を採択。2004(平成16)年には、戦時中の戦争協力に関する消息(門主から信徒に出された文章)などを今後は用いないとする宗令を出しています。

戦争と厚別 7 中国帰国者家族の今



中国舞踊の練習



雪印種苗センターでバラ見物(ことし7月)

終戦前後の混乱の中、中国に残され、その後永住帰国した元残留邦人の家族のみなさんが、毎月1回、もみじ台管理センターに集まります。交流会が開かれるからです。参加者は札幌市在住の十数人で、およそ半分の方は厚別区内に住んでいます。かつては元残留邦人である一世も参加していましたが、戦後80年が経ち、参加者は子ども世代になりました。二世のみなさんも中国で生まれ育ったため、今も中国語で生活しています。

交流会では体操をしたり、中国舞踊の練習をしたり、持ち寄ったお菓子でお茶を飲んだり、楽しいひと時を過ごします。時には近郊の観光スポットに出かけることもあります。



持ち寄った菓子で近況を語り合う

1945(昭和20)年8月9日、旧ソ連が参戦し、旧満洲(中国東北部)に攻め入りました。当時旧満洲には、国策による開拓移民・満蒙開拓団の人たちをはじめ、約150万人もの日本人が暮らしていました。戦乱の中で、中国に残された子どもや女性も少なくありませんでした。戦後は日中の国交がなかったため行き来も、帰国もかありませんでした。1972(昭和47)年、日中の国交が回復した後、ようやく帰国を果たしたのです。

もみじ台の交流会を開くなど、帰国者の支援に当たっている北海道社会福祉協議会・北海道中国等帰国者支援・交流センターによると、センターが把握している中国からの帰国者は、札幌市で589人で、そのうち3分の1の185人が厚別区内で暮らしているということです。

戦争と厚別 8 中国帰国者家族の今



長野太郎さん(85)

長野太郎さんは厚別区内で暮らす帰国者のリーダー的存在です。長野さんは旧満洲の旧ソ連との国境に近くで家族4人で暮らしていました。1945(昭和20)年8月、旧ソ連軍の攻撃に遭って5歳で孤児になりました。その後、二組の中国人の養父母に育てられました。このため、日本名と2つの中国名の3つの名前を持っています。機械修理工場で働きながら学校に通い、若くして工場長にまでなりました。しかし、文化大革命が始まり、日本のスパイという濡れ衣で投獄されて、すべてを失いました。その後脱走し、しばらくは山中に身を潜めて暮らしたといひます。



10歳頃の長野さん(右) 中国人養父とともに

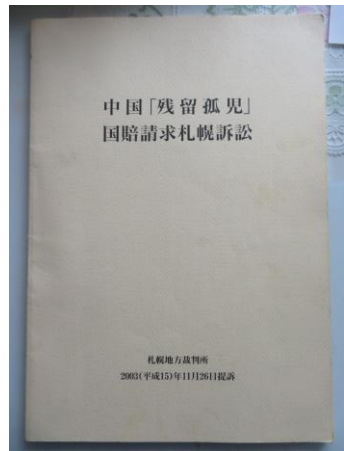
1986年、訪日調査に参加し肉親を捜しましたが、見つかりませんでした。身元不明のまま、1990(平成2)年、50歳の時に中国人の妻や4人の娘とともに帰国。中国東北地方と気候風土が似ているということで、北海道を永住の地に選びました。

しかし、帰国後も国からは十分な支援が受けられず、日本語も話せないまま、清掃や車の解体の仕事をしたりして懸命に子どもたちを育て上げました。



長野さんは家族6人で永住帰国した

国策として旧満洲への移民政策を推し進めた国の責任を問う国家賠償訴訟が、2002年から全国15カ所で起こされました。道内の帰国者も2003年に札幌地裁に提訴。長野さんは85人の原告団の団長を務めました。一審では訴えは退けられましたが、裁判や世論を受けて2007年に生活支援給付金の支給などを盛り込んだ改正中国残留邦人支援法が成立。各地の原告団もこれを受け入れ、裁判は終了しました。「戦争で死んだ人も多い中で、今まで生きられたのは幸運かもしれない。でも、すごい苦労もした。戦争で一番苦しむのは庶民だ」。波瀾万丈を生き抜いてきた長野さんの言葉です。



戦争と厚別 9 信濃小学校と戦争



考古館には、地域や学校の歴史的な資料が保存・展示されています。戦前・戦中の資料の一部を紹介します。



出征する兵士に贈られた寄せ書き。大和魂、武運長久、武士の誉、尽忠報国などの勇ましい言葉が書かれています。

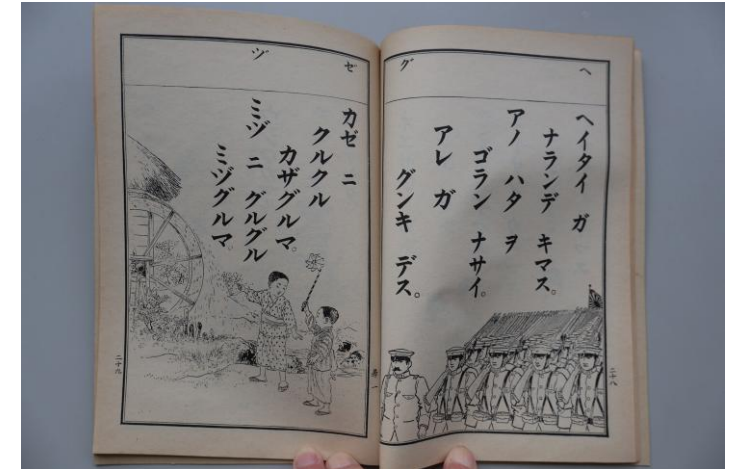


1942(昭和17)年の男子児童。手足の細さが目立ちます。戦時中は児童も出征兵士の家に援農に行きました。



信濃青年訓練所による国防貯金の呼びかけ。「一人一銭 飛行機十台」というスローガンが書かれています。

信濃小学校は1893(明治26)年の創立で、132年の伝統を誇ります。玄関を入ると正面に郷土資料室「考古館」があります。



尋常小学読本 巻一 文部省

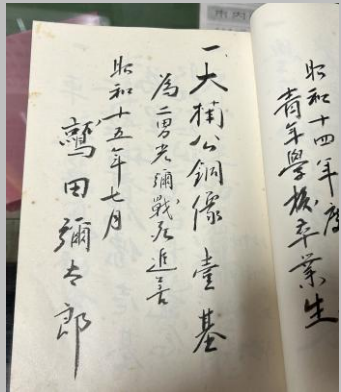


戦前の日本地図帳

戦争と厚別 10 信濃小学校と戦争



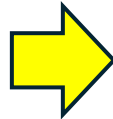
白石村 鷺田彌太郎村長



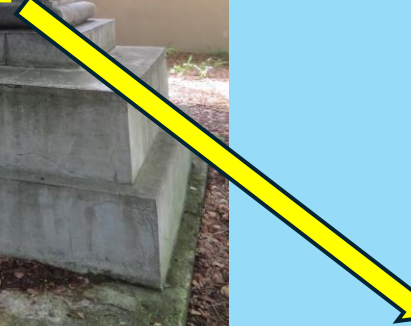
信濃小学校の寄付台帳



楠木正成の銅像



山上憶良の歌碑



1940(昭和15)年、信濃中学校の前に忠君愛国の鑑と言われていた大楠公(=楠木正成)の銅像が建てられました。当時の白石村長・鷺田彌太郎が、旧ソ連とのノモンハンの戦いで前年に戦死した次男・光彌の追善供養として母校に寄贈したものでした。親族は後に村長は「子供をすすんで軍隊に志願させた」と語っています。村長としての責任感だったのでしょうか。台座には、楠木正成の「七生報国」(七回生まれ変わっても国に忠誠を尽くす)という忠君愛国の言葉が刻まれていました。しかし、戦争が始まると、兵器を作るために国に金属を提供する「金属供出」が広まり、この銅像も二宮金次郎の銅像とともに供出されました。

戦後は台座だけが残った状態になっていましたが、終戦から13年経った1958(昭和33)年、台座の上に石の歌碑が建てられました。刻まれたのは「しろがねも くがねも玉も何せんに まされる宝子にしかめやも」。どんな財宝より大切なのは子どもだという親の気持ちをストレートに詠んだ山上憶良の歌です。これを建てたのも鷺田彌太郎でした。台座にあった「七生報国」の文字は削られましたが、今もその跡が残っています。戦中・戦後で姿を変えた石碑は、かけがえのない息子を失った村長の痛切な思いを今に伝えています。